

2021 年度若手ワークショップ 実施報告書

下記の通り若手ワークショップを実施いたしましたのでご報告いたします。

実施概要

- ・実施日時：2022 年 3 月 31 日（木）15:00-19:00
- ・実施形式：オンライン（Zoom ウェビナー）
- ・メンバー：報告者 畔柳千明（東京大学）
報告者 小野成信（東京大学）
報告者 浜田華練（日本学術振興会／オックスフォード大学）
報告者 細川瑠璃（東京大学）
コメンテーター 袴田玲（岡山大学）
アドバイザー 安岡治子（東京大学名誉教授）
※所属はいずれも 2022 年 3 月現在
- ・参加人数：90 名（実施メンバーを除く，途中退席者を含む）
- ・ホームページ：<https://express.adobe.com/page/ONTwKasjJ8yEL/>

実施の趣旨

ロシアは言うまでもなくユーラシアにまたがる国であり，地理的にも，また概念的にも，常にアジアとヨーロッパ，東と西の間にあり，その両方の側面を持ちつつ，その間で常に揺らいできた。ロシアの東と西，あるいはもう少し広げてユーラシア世界における東と西というテーマはこれまでも度々論じられてきたが，今回はテーマをロシア正教に限定し，ロシア正教において，東と西，東方と西方という概念ないしイメージがどのように形成され，またそういった概念・イメージにロシア正教自身がどのように影響を受けてきたのかということを検討したい。ロシア正教は，「西方」のキリスト教世界に対し，自身の「東方」性をアイデンティティとすることでその信仰と思想とを養ってきたと大まかに理解することができるが，ロシア正教の歴史において，「東」と「西」とは必ずしも綺麗に二分できる概念ではなく，時に流動的で，ロシア正教のあり方をめぐる問題に常に立ち現れてきた。こうした「東」と「西」という概念を軸にロシア正教について考えることで，ロシア正教，ひいてはロシアそのものに対して，何か新たな発見があるのではないかという問題意識のもと，今回のワークショップを実施した。

各報告の要旨

報告①：畔柳千明「ロシア正教会における中国伝道構想—『教理問答』(1865)を手掛かりに」

本発表では、中国における正教伝道の歴史の中で最初期に出版されたカテキズム『教理問答』(1865)を取り上げる。1850年代から1860年代にかけての時期以降、ロシア政府は中国に対して外交的に優位に立った。このためロシアでは、中国伝道を積極的に後押しすることでロシアの影響力を高めようとする議論が生まれ、天津条約(1858年)における内地伝道の規定などに反映された。その後、現実には中国での正教伝道に関する予算や人員はむしろ縮小の方向へと向かったものの、露中関係をロシア側から分析するにあたって、この時期の伝道拡大論はなお一考に値するのではないかと思われる。『教理問答』編纂者グレイ(Гурий(Карпов) 1814-1882)は、この実現しなかった伝道拡大論の支持者であった。発表では『教理問答』の特徴である、キリスト教と中国の宗教(儒教・仏教・道教)の比較に着目し、グレイが、中国文化に対して正教をどう位置づけたのか分析する。

報告②：小野成信「19世紀ロシア正教神学における教会論とシノド制」

19世紀ロシア正教会の神学者、府主教フィラレート・ドロズドフは「総主教とは1人におけるシノドであり、シノドとは数人の成聖され選ばれた人々における総主教なのである」と述べ、またシノドを公会(собор)と言い換えている。17世紀ロシア正教会においては、総主教が主教集団の第一人者たる首座主教の任を担っていたが、ピョートル1世によって総主教制は廃止され、教会の統治形態としてシノド制が導入された。一般にシノド制は、国家に対する教会の従属として捉えられ、フロロフスキーなどの神学者も同様の見方をとる。しかしホンジンスキーは、フィラレートの言葉に見られるように、19世紀ロシア神学においてはシノドを教会論的に「公会」と捉える考えがあったことを指摘し、シノド制によって変わったのは教会と国家との形式的関係だったと主張する。本発表では、これらの議論を概観しながら、教会論におけるシノド制の位置づけについて検討する。

報告③：浜田華練「<キリスト教東方(ХРИСТИАНСКИЙ ВОСТОК)>への眼差し—19~20世紀ロシア神学におけるシリアの聖イサアクの受容」

シリア人イサアク(Исаак Сирий, ニネヴェのイスハーク)は、ドストエフスキー『カラマゾフの兄弟』においてその名が言及され、彼の思想や作品にも影響を与えたとき

れる7世紀の修道士である。ドストエフスキーに限らず、19世紀～20世紀初頭のロシアにおける「修道思想ブーム」とでもいうべき現象の中で、イサアクは特に人気を博した思想家の一人である。しかし、イサアクはイスラーム支配下のメソポタミアのニネヴェ（現在のイラクのモースル近郊）を拠点とし、シリア語で著作活動を行い、さらに宗派としては431年のエフェソス公会議を契機として分離した東シリア教会に属していた。つまり、地理・言語文化・教義、あらゆる面において「ギリシア正教」の範疇から外れる人物である。本発表では、ロシア正教におけるイサアクの著作が受容の過程を明らかにするとともに、その過程で彼の「東方性」「非ギリシア性」がどのように解釈されたかを検討する。

報告④：細川瑠璃「20世紀ロシア宗教思想と西欧」

20世紀初頭に興隆期を迎えたロシア宗教思想は、一般に、西欧近代への対抗として、ロシア正教をロシアの進むべき道を照らすものと見做すことで発展したと考えられている。しかしながら、大きな傾向としてはそうであるにしても、個別の思想家に目を向ければ、実際にはロシア宗教思想と西欧の思想は複雑に絡み合っていることがわかる。その一例として、本発表では、ロシアの思想家でロシア正教の司祭でもあったパーヴェル・フロレンスキイ（1882-1937）が、ドイツの詩人ノヴァーリス（1772-1801）の思想に共鳴し、インスピレーションを得ながら、キリスト教が目指すべき個と生の哲学のあり方を模索したことを取り上げ、ロシア宗教思想ないしロシア正教にとっての「西」の概念を再考する。

質疑応答

報告①に関して

質問：

ロシアの中国伝道の特徴はどういったものか。

回答：

北京の宗教使節団の特徴は、ロシアの中央政府に直接属していた点である。例えば『ニコライの日記』にも書かれているように、日本の伝道団は資金面で国庫以外にも、教会などの人脈を利用して幅広く資金を集めていた（1879年9月26日ほか）。資金提供者の一例は正教宣教協会（Православное миссионерское общество）であり、同協会の機関誌「Миссионер」（1874-1879）には日本伝道関連の記事が多く掲載されている。一方同時期の中国の伝道団は、基本的に、資金面で国庫に依存していた。正教宣教協会には参

加しておらず、結果として«Миссионер»の中国関連記事は日本に比べて圧倒的に少ない。

質問：

現代中国におけるロシア正教会の教勢の展望をどのように見るか。

回答：

ロシアの対中融和姿勢、中国政府の宗教政策からして教勢がただちに急速に拡大することは考えづらいが、両国の外交において正教会は無視できないファクターである。ワークショップ当日は言及できなかったが、現代中国におけるロシア正教会の活動の実態として、香港在住の研究者によるレポートが参考になる（Loretta E. Kim and Chengyi Zhou, *The Russian Orthodox Community in Hong Kong: Religion, Ethnicity, and Intercultural Relations* (Lanham: Lexington Books, 2021)）。

報告②に関して

質問：

「総主教解任」という例はニーコンの場合以外にあったか。

回答：

コンスタンティノープル総主教については、特にオスマン帝国による支配の時代には度々総主教が解任されるということがあったが、ロシア総主教については、ニーコン以外には解任の例はない。

質問：

ニーコン事件とシノド制への移行に関係はあるか。

回答：

ピョートル1世が総主教制廃止を考えた理由として、君主に匹敵する権威の存在となったニーコン総主教の再来を許さないというものがあつたとされる。したがって、ニーコン総主教と、総主教制廃止、シノド制導入の間には関係がある。

質問：

今般のウクライナ情勢の背景として、ウクライナ正教会とロシア正教会（モスクワのキリル総主教）との確執が指摘されている。正教会の教会統治体制を研究する立場から、東方正教圏の国々における政府と教会の関係が、今後変化する（たとえばより「民主化」を志向するといった）可能性は考えられるか。

回答：

政治形態の変更によって、政府と教会との関係が変化することは、歴史上度々あった。たとえば、ロシア革命によってロシア帝国が減んで、その後にソ連が成立したとき、あるいはソ連が崩壊し、ロシア連邦が成立したときである。さらに、セルビア正教会はセルビアのみならず、旧ユーゴスラビアの正教会全体を管轄とするとされるが、政治状況に伴い、モンテネグロでセルビア正教会からモンテネグロの正教会を独立させる動きが強まるという例もある。したがって、今後、正教圏の国々でそれぞれの政府との関係によって、教会の立ち位置が変化する可能性は高いだろう。

質問：

現在のロシア正教会研究では、シノドの役割や正統性を以前より肯定的に論じることが多いのか。この発表もそうした研究動向に与するものと解してよいのか。

回答：

現在のロシア正教会においても、シノド制自体については否定的に論じることの方が多。本発表では、シノド制に肯定的な意味づけを行う論をたどり、シノド理解をより広げることがを目的とした。

質問：

19 世紀ロシア正教の教会論とシノド制だが、ロシアへ逃れていたイエズス会の影響はあるのか。あるとすればどのようなものか。

回答：

イエズス会は 18 世紀末～19 世紀初にロシアで庇護され、1820 年にロシアから排除されたが、イエズス会自体とロシア正教会の教会論やシノド制に関係があったのかどうかは存じ上げない。ただし、ロシア正教会の神学が、カトリック教会の神学の影響を大きく受けていたのは事実である。また一般的に、シノド（ないし聖職参議会）設立の際に参考にされたのは、ドイツなどのプロテスタント系教会のシステムだったとされる。

報告③に関して

質問：

「ネストリオス派」という呼称が現在では不適切とされているのはなぜか。

回答：

「ネストリオス派」という呼称は、431 年のエフェソス公会議で断罪されたネストリオ

スの追従者という意味。しかし、実際の歴史的経緯としては、エフェソス公会議よりも先にローマ帝国の支配権外であるペルシア領内でキリスト教徒が教会を形成しており、これが現在の東シリア教会（アッシリア東方教会）、すなわち「ネストリオス派」とカテゴライズされてきた集団の母体である。そして、このペルシアの教会に、エフェソス公会議後に帝国内で迫害されたキリスト教徒が合流したという経緯があるため、ネストリオスが教会の創始者であるように誤認させる「ネストリオス派」という呼称は適切ではない。また、ネストリオスの思想は、東シリア教会においては異端視まではされないものの、主流派ではないため、その点においてもこの呼称は不適切である。

質問：

イサクの説教における「現世」観について、それが『カラマーズフの兄弟』でゾシマ長老がアリョーシャに俗世へ出ることを進めたこととつながっているとしたら、興味深い。

回答：

イサクの「現世」観は、当時のシリア・キリスト教徒を取り巻いていた政治的・社会的状況と不可分である。すなわち、イサクにとっての「現世」は、修道生活との対比における俗世という意味だけでなく、具体的な社会そのもの、異教徒であるムスリムに支配される世そのものでもあった。ドストエフスキーがそのことまでくみ取っていたかどうかは不明だが、ドストエフスキーがイサクの「現世」観を、当時のロシア社会の文脈において再解釈した結果が『カラマーズフの兄弟』に現れているとすれば、確かに興味深い。ぜひロシア文学、ドストエフスキーの専門家と協力して明らかにしていきたい。

報告④に関して

質問：

フロレンスキイは原始キリスト教と「中世」を同一視していたのか。原始キリスト教はマイノリティとして迫害された存在ではなかったか。

回答：

フロレンスキイにとって原始キリスト教は、文献学的試みによって歪められる前の、キリストの道ゆきを個々人が自分の体験として経験することであって、史実としての原始キリスト教やその社会的位置付けは考慮されていない。そのような素朴な信仰が生活に根付く時代として、「中世」というものを夢想していた。この点でフロレンスキイは極

端な言い方もして、西方と東方の違いについて「フィリオクエなど些細な問題である。それよりも、早朝の時課の前にはものを食べないとか、祝祭の日にはピログを食べるとか、そういう生活の中に信仰があることの方がはるかに重要である」と言っており、これは生活から信仰が失われてしまった今の西方への批判の文脈だが、フロレンスキイは教義よりも経験を重視していた側面があり、キリストを身近に知っていた人々と同じ強度でキリスト教を自身の経験として受け止めることが何より重要で、それが可能となる時代としての「中世」であった。

質問：

ノヴァーリスの「すべての経験はリズムである」という思想はそれ以前のキリスト教でも共有されていたものか。

回答：

ノヴァーリスの思想は、キリスト教というよりはパラケルススやベーメなどの自然神秘思想から着想を得ているものと思われる。ただ、自然神秘思想そのものがキリスト教から派生している側面はあるので、その意味ではキリスト教とも無関係ではない。

コメンテーターとの質疑応答

報告①に関して

コメンテーターからの質問：

『教理問答』における「公審判」「私審判」といった概念は、ビザンツ期には見られなかったものであるが、どこに由来するのか。

また、『教理問答』は具体的にどのような状況で使用されていたのか。

報告者からの回答：

「公審判」、「私審判」という言葉は、『教理問答』より早い時期に成立した『東教宗鑑』（1860 初版）に既に見えており、同書が«Зерцало православного исповедания»の翻訳であることから、遅くとも 18 世紀にはロシアに入っていたと考えられる。なお宗教使節団では在華イエズス会士の著作がよく読まれていたため、「公審判」「私審判」の漢訳は後者に由来する可能性もある。

また、『教理問答』が使用されていた状況に関しては、『教理問答』が神学的な内容に力を入れて編集されていることから、かなり高度な知識人を対象としていたのではないかと考えられる。ただし、まだ漢訳のなかった旧約聖書からの引用が含まれているなど、

具体的な使用状況については、なお明らかでない点が多い。

報告②に関して

コメンテーターからの質問：

シノドスとは「招集される会議」のことだが、ピョートル1世が教会統治機関の名称として用いたのは正当化のためではないかと思える。ビザンツ帝国ではシノドスは、皇帝が招集し、主教をメンバーとするもので、総主教を罷免することもあったが、常設の機関だったことはあまりない。

ロシアのシノドは、[語源となっている] ビザンツのシノドスとは異なるようだが、ロシア正教会の府主教制時代は、ビザンツ的なシノドスと両立できていたのか。総主教制になって以降、ロシアの総主教はカトリックの教皇に比するような強い権力をもつようになったのか。

ロシア正教会のシノドの委員は、主教だけでなく、他にもいたとのことだが、任命権は国家にあったのか。ビザンツ帝国では、皇帝が主教を任命するのに対して、[コンスタンティノープルの] 総主教が皇帝に戴冠するなどの複雑な関係があったが、ロシアの場合は誰が誰を選び、誰を任命するのか。

報告者からの回答：

ロシア正教会において府主教制時代は、府主教と公会議(つまりビザンツ的なシノドス)が同時に成り立っており、府主教は公会議の一員として認識されていた。

総主教制では、総主教ニーコンに見られるように、総主教の権限が上昇した。総主教は、公会議の一員というよりは、ローマ教皇のように、主教団からなる公会議の上にある、超越したものとして認識されるようになる。

ロシア正教会のシノド制時代におけるシノド委員は、皇帝によって任命される。シノドが主教を選び、皇帝がそれを承認するが、教会の儀式としての主教の叙階は、教会の定めのおり、他の主教たちが行う。また、ロシア皇帝の戴冠式を執行するのは主教だった。

報告③に関して

コメンテーターからの質問：

「キリスト教東方」という用語について、より詳しい説明がほしい。例えば、ロシア以外の地域でも一般的な用語なのか。

ビザンツ神学では、救済対象として、すなわちいずれ到来する「神の国」の住人として、動植物が含まれるかどうかは、神学者によって見解が分かれる。今回の発表を聞く限りでは、イサアクは動植物まで救済の対象に含めているように見えるが、イサアク個人の、あるいはシリア・キリスト教全体の思想傾向に、「人間以外の被造物を含めた救済」が明確に存在するかどうか。

報告者からの回答：

ロシアにおいて、「キリスト教東方 Христианский восток」という語は、神学用語ではなくむしろ外交用語として一般化した。帝政ロシアは、18世紀から20世紀初頭にかけて、オスマン帝国への干渉、およびコーカサスや中央アジアなどへの領土拡大および新たに獲得した地域での支配体制の強化を進める中で、非キリスト教徒が多数を占める地域におけるキリスト教徒のコミュニティを、いわばキリスト教徒の「飛び地」として、東方における勢力圏拡大の拠点とした。しかし、外交用語としての「キリスト教東方」の初出がいつ頃なのか、正確には把握していないため今後の研究の課題とする。また、東方におけるキリスト教徒コミュニティを勢力圏拡大の足掛かりとする方針は、イギリスのインド支配、フランスのシリア支配にも見られる。というより、これらが先発であり、ロシアの政策はむしろ後追いであった。こうした英語圏やフランス語圏など、ロシア語圏以外における「キリスト教東方」の用語化及び概念形成の過程は、今後の研究にで明らかにしていく。

イサアクは、明確に人間以外にも救済の対象に含めていたと考えられる。また、イサアクと並び称されるシリア教父であるエフREMは、『楽園について』という詩を著し、創世記における楽園ではなく、いずれきたるべき楽園の在り方について描写している。そこには、植物も動物も生き生きと描写されている。シリア・キリスト教においては、救済対象として動植物を含めることはむしろ当たり前のこととして受け入れられている。

報告④に関して

コメンテーターからの質問：

ロシアにとっての「中世」とは何か。そこにビザンツは含まれているか。

報告者からの回答：

20世紀初頭のロシアにおいて、「中世」への憧憬はフロレンスキイに限らず、例えばベ

ルジャーエフ、カルサーヴィンなどにも見られる。フロレンスキイが参照していたヴァ
チェスラフ・イワーノフもまた、歴史の流れを「昼の時代」と「夜の時代」に区別し、
フロレンスキイはイワーノフの言う「夜の時代」を「中世」と位置付けている。彼らに
大まかに共通しているのは、ルネサンス以来の（主に西欧の）近代を合理主義・功利主
義・プラグマティズムが跋扈する時代と位置付けるのに対し、「中世」を非合理主義的
で、信仰が根付いた時代と考えることである。一方、宗教思想の側面からだけでなく、
19世紀末から20世紀初頭のロシアでは、美術においても「中世」のロシアの模索が
あった。それは例えばラドネジの聖セルギイの絵を描いているネステロフや、ロシアの
フォークロアを描いたヴァスネツォフ、ロシア、キエフ・ルーシにインスピレーション
を求めた Мир Искусство などに見られ、これはフロレンスキイとも無関係ではない。フ
ロレンスキイが住んでいたセルギエフ・ポサードと Мир Искусство の拠点の一つアブ
ラムツェヴォは一駅の距離であり、ネステロフはフロレンスキイの肖像画も描いている
し、思想家と芸術家の間に交流があり、架空のノスタルジーにせよ、「中世」的なもの
を求める共通の空気というものがあったように思う。また、ビザンツが含まれるかとい
う問いに関しては、フロレンスキイの参照元として多いのはロシアの聖人や長老だが、
例えば讃名論争との関わりの中で、グレゴリウス・パラマスは大いに参照している。フ
ロレンスキイにとっての「中世」は、ロシアだけでなく、むしろ東方も西方も信仰とい
う共通点において緩やかに一体となっていた時代であった。

ワークショップを終えて

本ワークショップは、オンライン開催、また平日の開催にもかかわらず、90名の方々に参加していただいた。本ワークショップの企画は一年前に遡り、プログラム考案の時点ではロシアとウクライナが現在のような状況になることは一切想定していなかったが、一般の参加者の中には、昨今の情勢への関心から参加して下さった方も多くいたように思う。実際に、特に報告①、②に対して、時事的な問題と絡めた質問も見られた。

ロシア・ウクライナ情勢では、たとえばウクライナ侵攻に対するキリル総主教の発言とそれに対する世界的な反発などに見られるように、ロシア正教が否定的側面から注目を集めることも多いが、今回のワークショップでは、アカデミックな研究姿勢に基づいた報告を、「東」と「西」という指標のもと、それぞれ時代的にも地理的にも、またジャンルの上でも異なる視点から行ったことで、ロシア正教のみならず、ロシアのアイデンティティそのものをも考察することができ、図らずも、また間接的ながら、今回の事態に対しても関連する話題を提供できたように思う。

参加人数を考慮すると Zoom のミーティング形式では容量が足りず、ウェビナー形式で行ったため、質疑応答の方式はやや一方的にならざるを得なかったが、質問は多方面に渡り、報告者にとっても自身の論点を明確にする良い機会となり、また報告者が気づいていなかった新しい視点も多く得ることができた。これらの質疑の内容は、今後のそれぞれの研究においてさらに活かしていきたい。

当初の計画からの変更の経緯

1) 開催時期について

開催時期は当初から 2022 年 3 月を予定しており、この点に変更はないが、コメントーターのスケジュールの都合から 3 月 31 日の開催となった。

2) 開催形式について

当初はハイブリッド形式を予定しており、会場設営費を予算案に含めていたが、コロナウィルス感染状況を踏まえ全面オンラインに変更した。

3) 論集作成について

当初の計画に含めていた論集作成を取りやめたことには以下の経緯・理由がある。

・開催時期が 3 月初旬であれば、ワークショップ終了後、3 月内（年度内）に論集を作成することが可能であったが、1) に記述した理由で 31 日開催となったため、年度内に論集の見積もりを出すことが困難となった。

・第一回の若手ワークショップでは論集を作成していたため、本ワークショップに応募した 2021 年 3 月の時点では論集作成が義務であると代表者が誤解していたが、2021 年 11 月、事務局の先生方と開催時期についてメールでやりとりをする過程で、提出義務のある「実施報告書」と論集とは別物であることを認識した。

・本ワークショップでの報告内容をもとに論文を執筆する予定のあるメンバーが複数おり、論文として投稿する前にワークショップ論集の形で発表してしまうことに抵抗があった。また、そのためにメンバーの大半が要旨のみを掲載するとなると、本報告書と同内容となってしまう、論集として作成する意義が失われると考えた。

以上により、計画を当初のものから変更する運びとなりました。大変申し訳ございませんでした。

2022 年 4 月 29 日

若手ワークショップ代表者 細川瑠璃